

大学生サッカー競技者の審判員とのコミュニケーション観

榎本, 恭介

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

89

(開始ページ / Start Page)

46

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

2022-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026028>

大学生サッカー競技者の審判員とのコミュニケーション観

人文科学研究科 心理学専攻

博士後期課程 3年 榎本 恭介

キーワード:

レフェリー, 抗議, インタビュー

諸言

サッカーにおいて、競技者は審判員から納得のいかない判定を下された場合に、審判員の判定に異議を唱えるシーンが度々見受けられ、これらの行動は一般的に抗議と呼ばれている。サッカーの競技規則によれば、審判員の決定に対するあからさまな抗議（言葉や行動）は反則となるが（公益財団法人日本サッカー協会, 2021）、試合中は競技者も興奮していることから、抗議に攻撃的、侮辱的なニュアンスが含まれることも珍しくない。

この抗議は判定に関するコミュニケーションとも捉えられ、このようなコミュニケーションが生じる理由として、サッカーのルールの特徴が考えられる。サッカー競技規則 2021/2022（公益財団法人日本サッカー協会, 2021）において「サッカーの競技規則は、他の多くのチームスポーツのものとは比べ、比較的単純である。しかしながら、多くの状況において「主観的な」判断を必要とし、審判は人間であるため、必然的にいくつかの判定が間違っただけのものになったり、論争や議論を引き起こすことになる」（公益財団法人日本サッカー協会, 2021, p.11）と記されているように、サッカーの判定場面には審判員の主観が含まれる場合がある。例えば、サッカーの代表的な反則であるハンドは、サッカー競技規則 2021/2022（公益財団法人日本サッカー協会, 2021）において「例えば手や腕をボールの方向に動かし、手や腕で意図的にボールに触れる」（公益財団法人日本サッカー協会, 2021, p.98）と記されている。このうちの「意図的」という部分については審判員の主観にゆだねられており、このような審判員の主観を理解するためのコミュニケーションとして、抗議が行われる場合もあると考えられる。実際に、大学生サッカー競技者を対象に判定に関する印象の調査を行った齊藤・内田（2017）によれば、競技者は下された判定に対するコミュニケーションを望んでおり、ルールにやや曖昧さのあるサッカーにおいては、下された判定を理解するためのコミュニケーションは競技者にとって重要なものであると考えられる。

一方、すべての競技者が審判員とのコミュニケーションを求めているのだろうか。齊藤・内田（2017）の自由記述による調査の中には、「正しくない判定もあったが審判も人間なのであまり文句を言わないようにしたい」/「審判の判定に文句を言わずリスペクトすることを考えてやっている」（齊藤・内田, 2017, p45）、「審判がいてこそ試合が成立するので文句など言える立場ではない」（齊藤・内田, 2017, p45）といった回答も示されており、競技者ごとに審判員とのコミュニケーションに対する考え方は異なると考えられる。

そこで本研究では、大学生サッカー競技者の審判員とのコミュニケーションに対する考え方について探索的に検討を行うことを目的として、インタビュー調査を実施した。

方法

1. 調査対象者

4年制大学のサッカー部（サークルは除く）に所属する大学生で、研究参加に同意した男性11名、女性6名の合計17名（平均年齢18.33±0.47歳）を調査対象とした。対象者の属性を以下のTable 1に示す。

Table 1 インタビュー対象者の属性

対象者	性別	年齢	ポジション	サッカーの 経験年数	これまでの最高成績
対象者A	男性	18	GK	11	全国大会準優勝
対象者B	男性	18	DF	11	全国大会ベスト8
対象者C	男性	21	DF	16	全国大会ベスト8
対象者D	男性	21	DF	17	全国大会ベスト4
対象者E	男性	21	DF	11	全国大会ベスト32
対象者F	男性	20	DF	16	県大会ベスト16
対象者G	男性	19	MF	13	全国大会ベスト32
対象者H	男性	18	MF	10	地方1部リーグ優勝
対象者I	男性	19	MF	15	全国大会ベスト16
対象者J	男性	21	MF	14	県大会優勝
対象者K	男性	18	FW	9	全国大会優勝
対象者L	女性	20	GK	3	全国大会ベスト16
対象者M	女性	21	DF	14	全国大会優勝
対象者N	女性	22	DF	11	全国大会出場
対象者O	女性	21	DF	6	地方大会ベスト16
対象者P	女性	19	MF	8	地方大会優勝
対象者Q	女性	19	FW	12	県大会ベスト4

2. 調査時期

調査時期は、2016年7月—2017年10月であった。

3. 調査項目

審判員とのコミュニケーションに対する考え方を明らかにするため、「選手と審判はコミュニケーションをとって関係性を築くべきだと思いますか。またなぜそう思いますか」という質問を行った。また、前述の質問のほかに、「自分にとって納得のいかない判定をされたことはありますか」「(はいと答えた人に) その時、あなたはどのような行動をとりましたか、なぜそのような行動をとりましたか」という質問も行った。

4. 手続き

本研究は、練習場のベンチ、もしくは対象者が所属する大学の空き教室にて半構造化インタビューを行った。その際、参加同意書を事前に配布し、研究参加の同意を得た上で、インタビュー調査を実施した。なお、参加同意書には本研究の目的や所要時間、回収したデータの取り扱い方法、本研究から得られる結果のフィードバック方法、研究者の情報と連絡先について明記した。そして、参加者が回答をいつでも中断できる権利を明記し、倫理的な配慮を行った。本調査は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会において審査を受け、研究実施の承認を得た上で実施した。インタビュー実施時間は最も短い者で約5分、最も長い者で約20分、一人当たり平均して約13分ほどであった。なお本研究は、榎本・荒井(印刷中)の一部の研究と対象者を共有している。

5. 分析方法

自由記述によって得られた回答を整理・集約するにあたり、本研究ではKJ法(川喜田, 1970)を採用した。KJ法の4つのステップのうち、1つ目の「紙切れ作り」および2つ目の「グループ編成」に基づいて分析作業を行った。報告された回答を1つずつ紙切れにした上で、作業員間で話し合い、研究目的に照らして、同意にいたるまで吟味・検討し、それらの紙切れをカテゴリーに整理・集約した。議論の際に集約が困難だと判断された回答については、無理にいずれかのカテゴリーに集約することはせず、独立したカテゴリーとした。意味が不明瞭な回答や目的にそぐわない回答は分析の過程で除外した。これらの作業はスポーツ心理学を専門とする大学教員1名と心理学を専攻する修士課程の大学院生1名の計2名によって行われた。なお、カテゴリー名は【】、サブカテゴリー名は「」として表示している。

結果と考察

インタビュー調査の結果、大学生サッカー競技者の審判員とのコミュニケーションに対する考えについて、30の回答が得られた。そしてその得られた30の回答に対し、KJ法によって整理・集約を行った結果、計14のサブカテゴリーおよび2つのカテゴリーが得られた。集約された結果を、Table 2に示す。

Table 2 大学生サッカー競技者の審判員とのコミュニケーション観

カテゴリ (回答数)	サブカテゴリ (回答数)	回答内容
積極的な考え (19)	審判員側に競技者と向き合ってほしい (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・(意思表示した際にいいからいいからと) 聞かされると、ちょっと、そうですね、いやです(対象者F) ・(審判員に判定の基準を) 聞きに行った場合は(返事を)して欲しいですね(対象者E) ・(意思表示をした際に) 審判員にリアクション取って欲しいですね。ある程度は、少しは欲しいですね。あったほうがこっちも伝わってってというのが分かるし、あっちも聞いてくれてなんなっていうふうにしてプレーできるので(対象者F) ・(審判員に質問しに行った際に「いいからいいから」みたいに返されると) そのいいからは何でもいいんだ、みたいな。とか、すごい、自分のなかではファウルじゃないと思っていろいろに、答えてくれれば、割とすっきり、すっきりではないけどまあ、多少すっきりするかなと思うので(対象者C) ・例えばアフターでファウルをされた時とかに、今はボールにいったのか、アフターなのか、吹かれてないってことはボールにいったって判定じゃないですか。「今はアフターじゃないんですけど」っていうのを聞きにいったりするんですけど、だいたい流されます。「まあまあまあ」みたいな感じで(対象者O)
	判定の基準を知るためにあった方がよい (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分はこういうジャッジする人だっているのは、ある程度分かっていての方が僕らもやりやすいと思います(対象者J) ・どういジャッジの基準を持てるのかとか、自分が納得いかなかった場合にそういうことを聞けるタイミングがあるなら聞くとか、わからんことあったら聞くとかですかね(対象者I) ・(自分の疑問があるまま、試合を続行させられると、次どうしたらいいんだろうという風になってしまうので) 何というファウルみたいなとかよくあるんですけど、そういうのちょっと答えて欲しいなっていう部分はありますね(対象者C) ・ギリギリのところまで攻めてみて、ここやってたらファウルでここまでなら大丈夫っていうのがすくわれば僕たちも対応はしやすいかなっていうのが、この審判はこういう基準でやっていると、この審判はこういう基準でやっているとというのが分かったほうが、僕らもやりやすいかなって思います(対象者J)
	スムーズな試合運びのためにあった方がよい (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・そうですね、僕はコミュニケーションをとったほうが、お互いやりやすい、良い試合運びができると思います(対象者J) ・(ファウルの基準を尋ねた際、取り合ってもらえないと) 結構、そうやってもらえると、逆にゲームをコントロールしてもらえし、取ってくれたらこっちにチャンスが来るときもあるので、まあ信頼関係は築けた方が、ゲームとか選手としては、試合が運びやすいかなって(対象者C) ・ファウルがあった程度とか、細かいことが起きた時とかはしゃべってけば信頼関係築けて、さきも言ったんですけど、ゲームがうまくいくこともあるんで(対象者C)
	審判員に悪い印象を持たないようにするためにあった方がよい (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・審判となんかそういう、仲良くなるじゃないですけど、まあそういういい関係を築いたら味方につけることができ、ある程度、ちょっと何か悪いプレーっていうか、そういうのをしても判定をこっちの味方にしてくれることがあるので、試合を有利に進めるためにはいいと思います(対象者G) ・不公平に感じるジャッジとかがあっても「いやー今のはこうじゃないですかー」みたいな感じでコミュニケーションを取って、「いやでも今のはこうだったからとったんだよー」みたいに返してもらえたら、冗談ではないですけど、「次同じのあったらとってくださいよー」みたいな。それはまあ言い過ぎかもしれないですけど、そういう感じのコミュニケーション取るのは必要だし、審判を味方につけるっていうのはサッカーにおいてそれ一つなんで、別に悪くはないと思います(対象者A)
	審判員から見えづらいところでファウルをしてくる競技者を報告するためにあった方がよい (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・見てないところで、ファウルだったりしたら、あの人が引張ってたりするから見て下さい、とかっていうのは話しかけたいですね(対象者B)
	チームメイトと審判員の仲を取り持つためにあった方がよい (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ちょっと前なんですけど、味方選手が結構文句言ってるって審判に、結構注意されてたんですよ。それで結構審判も熱くなって、ゲームがハーフタイムの時に、すいませんって。こういう選手やけど、あんまり気にせんと良いジャッジして欲しいみたいな話を一回したことありますね(対象者E)
	プレースタイルを知ってもらうためにあった方がよい (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・動いてくる審判って、やっぱり、近くで見えてくるから自分のプレースタイルをちょっとでもわかってもらったら、あ、この子いまだからオーバーラップすんねんな、とか思われたら、ちょっと流してくれたりとか、声出してるとかやっぱり自立じゃないですか試合中。あの子また走ってる、とかになったらちょっと味方に付くかなって(対象者E)
	礼儀としてあった方がよい (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションっていうと少しずれちゃってもいいんですけど、やっぱり礼儀っていうか挨拶とかはしっかりするべきだと思っていて、〇〇大(自分の所属している大学)って他のチームよりちょっと真面目なのかなって思ってますけど、なんか結構こう挨拶とか握手とかしっかりすることによって、相手に悪い印象を与えないと思うので、しっかりそういうことをやることでマイナスになることはないんじゃないかなと思うので、ちょっと大事なかなって(対象者L)
	自チームのことを審判員に知ってもらうためにあった方がよい (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・(審判員が自チームも相手チームのことも) まったく知らない状態で審判がいてっていう状況があれば一番ベストだと思んですけど、現実そうでないっていうか、〇〇県に試合に行ったら〇〇県の審判員じゃないですか。だから(審判員は相手チームの) 顔も知ってるし、なんとなく〇〇の大学だなぁって思うので、だったら逆に、(コミュニケーションをとって) どちらか知ってる状態にしてしまってるって思ってます(対象者O)
慎重な考え (11)	審判員の中立性が保たれるならばあってもよい (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャッジに不公平が生れるならない方がいいですけど、でもやっぱり同じピッチに立ってるんで、そこはまああってもいいんじゃないかなって。まあ自分も結構試合中審判とよく話したりするので(対象者H) ・しゃべったり、そのためにプロとかで笑いながら、話したり。そういうのは見んすけど、いいなと思うし、ああいうコミュニケーションの取り方は良いと思うんですけど、それによってジャッジが不公平になったりとかするんだしたら、やめた方が良く思うし。それは審判の人が考えてやるべきだと思います(対象者A) ・ラーン、築くべき。ラーン。いや、ちょうどいい距離感じゃないとだめだと思います。親しくなりすぎてもだめだし、ゲーム中は公平なジャッジが必要だと思うので(対象者A) ・築きすぎると、どっかか偏ったジャッジとか、そういう風になっちゃうと、あれなんです、ある程度はまあ、必要かな、とも思うんですけど、いきすぎるとやっぱり、偏っちゃうかなという風に思いますね(対象者I)
	審判員の中立性を保つためにない方がよい (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・仲介役っていうか、常にどっちかの方にもよらない中立な立場にあるべきだし、別にコミュニケーションをとる必要はないと思います(対象者K) ・やっぱり中立の立場にいなさいいけないと思うので、どっちかの(チームの) 一人がコミュニケーションをとることによって、その人のなんかこう、そっちをちょっと気にかけてやうっていうのは審判がフェアにやるには妨げになるような感じがするので(対象者N) ・なんか難しいですね、勝負なんで。味方につけるべきっていうか、つけていいのかなって(対象者M) ・なんか別にそこでコミュニケーションを取って、そこに仲が生まれたとしても、結局審判は平等に見えないといけないんで、あんまり必要じゃないなって思います(対象者P)
	監督・キャプテンとならばあってもよい (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・全員とどつというのは難しいと思うので、審判が、やっぱり、キャプテン、監督ぐらいの、そのリーダー格じゃないですけど、とは取ったほうがいいかなと思います(対象者D)
	コミュニケーションを取って関係性を築くべきだと思うが取れるとは思わない (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・築くべきだと思うんですけど、いざ自分だとできないし、テレビとかで見ると、プロとかって激しいじゃないですか、結構。だから抑えたりするのが大切だと思うんですけど、ラーン、私たちが審判とコミュニケーションを取ることは、なんか考えられないって言うか。プロはプロ、プロじゃない人はプロじゃないって分ちやうって(対象者Q)
	自分の基準とのズレがないと考えているためとらなくてもよい (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・なんかその人の基準っていうのを、私は別になんか、知りたいと思わないですかね。審判はなんか、なっているんですけど、普通の審判であるって結構思っちゃってるんで。みんなある程度(基準が) 同じぐらいだと思ってるんで(対象者M)

まず大学生サッカー競技者の審判員とのコミュニケーションに対する考え方について、「審判員側に競技者と向き合ってほしい」「判定の基準を知るためにあった方が良い」「スムーズな試合運びのためにあった方が良い」「審判員に悪い印象を持たれないようにするためにもあった方が良い」「審判員から見えづらいところでファウルをしてくる競技者を報告するためにあった方が良い」「チームメイトと審判員の仲を取り持つためにあった方が良い」「プレースタイルを知ってもらうためにあった方が良い」「礼儀としてあった方が良い」「自チームのことを審判員に知ってもらうためにあった方が良い」というサブカテゴリーから構成される【積極的な考え】というカテゴリーが得られた。

「判定の基準を知るためにあった方が良い」というカテゴリーからは、齊藤・内田 (2017) と同様に、審判員の判定基準について疑問や齟齬を感じ、競技中にその疑問や齟齬についてのコミュニケーションを求めている競技者の考えが示された。「審判員から見えづらいところでファウルをしてくる競技者を報告するためにあった方が良い」というサブカテゴリーからは、審判員にとって把握のしづらいところで不正な行為を行う相手競技者の存在を知ってほしいという競技者の心情が推察される。上記の2つのサブカテゴリーに基づくコミュニケーションは、競技者がプレーに専念するために重要であると考えられる。一方、そのコミュニケーションに攻撃的、侮辱的なニュアンスが含まれてしまった場合、フェアプレイやスポーツパーソンシップという観点から望ましい行為でなく、反則と判定されるリスクや審判員からの印象悪化というリスクも避けられない。そのため、コミュニケーションの取り方が重要になると考えられる。また、サブカテゴリー「スムーズな試合運びのためにあった方が良い」も上記の2つのサブカテゴリーに関連するものであると考えられる。判定基準や競技規則に違反した行為を行う相手競技者について、競技者と審判員がコミュニケーションを取り、それにより相互理解が進むことが、スムーズな試合運びにつながるのではないだろうか。

「審判員に悪い印象を持たれないようにするためにもあった方が良い」というサブカテゴリーからは、審判員からの印象の悪化を防ぐためにコミュニケーションを取る、という考えが示された。このサブカテゴリーに関連し、「チームメイトと審判員の仲を取り持つためにあった方が良い」というサブカテゴリーからは、チームメイトの印象悪化を防ぐためにもコミュニケーションは重要であるとする考えがみられた。「自チームのことを審判員に知ってもらうためにあった方が良い」というサブカテゴリーからは、相手チームと試合を担当する審判員の間には面識がある場合、自チームについても知ってもらおうとする、関係性の構築を目的とした考えが報告された。また、「礼儀としてあった方が良い」というサブカテゴリーも得られ、挨拶や握手といった競技外でのコミュニケーションを大切に、審判員との関係性を築きたいという競技者の考えが明らかになった。「プレースタイルを知ってもらうためにあった方が良い」というサブカテゴリーからは、サッカーにはアドバンテージ (意味; 「反則があり、反則をしていないチームがアドバンテージによって利益を受けそうなときは、プレーを継続させる。しかし、予期したアドバンテージがそのとき、または数秒以内に実現しなかった場合、その反則を罰する」(公益財団法人日本サッカー協会, 2021, p60)) という競技規則が存在し、自分のプレースタイルを審判員に認知してもらうことにより、審判員がよりアドバンテージを取りやすくなるのでは、という競技者の考えがみられた。これらのサブカテゴリーからは、積極的に審判員とコミュニケーションを取り関係性の築くことによって、試合展開などが自身や自チームに不利にならぬよう考えている競技者の存在が示されたと考えられる。

また【積極的な考え】カテゴリーにおいては、「審判員側に競技者と向き合ってほしい」というサブカテゴリーも得られた。このサブカテゴリーには、コミュニケーションを取った際の審判員側のリアクションを求める回答が含まれ、審判員のリアクションが競技者の審判員に対する印象やその後のプレーに影響を及ぼすことが示唆された。コミュニケーションは審判員にとって必要な特性やスキルとして示されており (村上・平田・佐藤, 2015; 村上・平田・村上・宇土・山崎, 2017), 競技者からのコミュニケーションに対する審判員のリアクションは、ゲームを円滑に進める上で重要な要因の1つと考えられる。一方、前述のように、競技者側からのコミュニケーションがリスpekトを欠くものであれば、審判員側も厳しい対応を必要とされることが予想される。やはりコミュニケーションの取り方は重要となるだろう。

一方、「審判員の中立性が保たれるならばあっても良い」「審判員の中立性を保つためにない方が良い」「監督・キャプテンとならばあっても良い」「コミュニケーションを取って関係性を築くべきだと思うが取れるとは思わない」「自分の基準とのズレがないと考えているためとらなくても良い」というサブカテゴリーから構成される【慎重な考え】というカテゴリーも得られた。

「審判員の中立性が保たれるならばあっても良い」というサブカテゴリーからは、審判員とコミュニケーションを取ることについては否定的ではないものの、コミュニケーションにより判定が自チーム寄りになることを憂慮する競技者の考えが示された。このサブカテゴリーに関連し、「審判員の中立性を保つためにない方が良い」というサブカテゴリーからは、審判員の中立性が偏らないように、そもそも審判員とはコミュニケーションを取るべきではないという競技者の考えが示された。これらのサブカテゴリーは、自チームが有利になる場合であっても、コミュニケーションが審判員からの印象に影響を及ぼすことを懸念しており、【積極的な考え】カテゴリーの「審判員に悪い印象を持たれないようにするためにもあった方が良い」などとは反対の考えを持つ者もいることが示されたと考える。

「監督・キャプテンとならばあっても良い」というサブカテゴリーからは、審判員とのコミュニケーションは取るべきだと思うが、サッカーは競技者の数が多いため、監督やキャプテンが代表してとった方が良いのでは、という意見がみられた。サッカーにおいては過去にキャプテンのみが審判員とのコミュニケーションを可能とするルールの導入が検討されたこともあり（フットボールチャンネル, 2016）、今後抗議があまりに過剰だと捉えられる場合、コミュニケーションの形が変わることも考えられるだろう。

「コミュニケーションを取って関係性を築くべきだと思うが取れるとは思わない」というサブカテゴリーからは、審判員とのコミュニケーションについて、取るべきだと思うものの馴染みがないという競技者の考えが示された。競技において審判員の判定に対し疑問を感じる場面に遭遇するが、それについてのコミュニケーションに難しさを感じている場合、なんらかのコミュニケーションのトレーニングが必要になると考えられる。

「自分の基準とのズレがないと考えているためとらなくても良い」というサブカテゴリーからは、自分と審判員の判定基準がおおむね同様と感じていることから、コミュニケーションを取る必要性を感じていない競技者の存在が示された。審判員ごとの基準が異なると感じている競技者が存在している一方、基準が異なると感じていない競技者の存在が示されたことは興味深い。このような考え方に至るにはどのような要因があるのか、またこのような考え方が競技中の振る舞いに及ぼす影響について、今後検討が期待される。

本研究では、大学生サッカー競技者の審判員とのコミュニケーションの考え方について探索的に検討を行うことを目的として、インタビュー調査を行った。その結果、大きく分けて【積極的な考え】と【慎重な考え】の二つの考え方があり、それぞれの考えの中にさまざまな考え方があることが示された。【積極的な考え】においては、審判員の判定基準の理解や違反を行う競技者の報告、良い試合運びのためにコミュニケーションを用いている競技者の存在が示された。一方、【慎重な考え】においては、審判員の中立性を懸念する意見や、審判員とのコミュニケーションの取り方に困難を感じている競技者、そもそもコミュニケーションの必要性を感じていない競技者の存在が示された。これらの結果は、今後サッカー競技者と審判員のコミュニケーションに関する取り組みを行う上で、1つの資料になるだろう。一方、本研究は競技者側のみの研究であり、審判員側がコミュニケーションについてどのように考えているのか、今後より詳細な検討が期待される。

引用文献

- 榎本・荒井 (印刷中). 大学生サッカー競技者における審判員に対する抗議の心理的要因 スポーツ心理学研究.
フットボールチャンネル (2016). FIFA, キャプテンのみが審判と対話可能とするルール導入を検討 Retrieved from <https://www.footballchannel.jp/2016/12/24/post191487/> (2022年4月1日).
- 川喜田 二郎 (1970). 続・発想法——KJ法の展開と応用—— 中央公論新社
- 村上 貴聡・平田 大輔・村上 雅彦・宇土 昌志・山崎 将幸 (2018). スポーツ審判員に求められる心理的スキルの評価——尺度の開発とその活用—— 東京体育学研究, 9, 1-9.
- 村上 貴聡・平田 大輔・佐藤 周平 (2016). トップレフェリーに必要な心理特性とは——インタビュー調査からの検討—— スポーツパフォーマンス研究, 8, 76-87.

齊藤 茂・内田 若希 (2017). 審判員の判定に関する心理学的考察：大学生サッカー選手を対象とした判定に関する印象調査
松本大学研究紀要, 15, 37-49.

公益財団法人日本サッカー協会 (2021). Laws of the Game 2021/2022 公益財団法人日本サッカー協会 Retrieved from
https://www.jfa.jp/documents/pdf/soccer/lawssofthegame_202021.pdf (2022 年 4 月 1 日).